

# 科技高 いきもの記 Vol.10 2020.9.30

佐藤龍平

## 社会性昆虫

# アリの一生（飼育）



7月中旬、校庭の横でアスファルトの上を歩いているケアリの仲間の新女王を見つけた。巣作りの場所を探しているようだ。今年生まれた新女王は、自分が生まれ育った巣を出て飛び立ち、オスアリと交尾する。交尾が終わると自ら翅を落としてしまい、新しい巣作りをするために歩き回る。今回見つけた女王アリはすでに翅が取れていたもので、おそらく交尾が終わったあとの個体だ。体内にオスから受け取った精子を貯めこんでいる可能性が高いので、**飼育してみることにした。**

7月31日、予想通り交尾は終わっていたようで、白い小さな受精卵を20個ほど産んだ。これが孵れば、最初の働きアリになるはずだ。アリの飼育は初めてだったので無事に産卵してくれて非常にうれしい。その後、卵が孵化して幼虫が現れた。この「**アリの幼虫**」は形がとて面白い。横から見ると「**J**」を逆さまにしたような形で、頭部だけ、特に**顎だけが妙に発達**していてそれ以外は手足も含めほとんど発達していない。手足がないのでほぼ動かず、ただじっと女王アリや働きアリたちから口移しでエサをもらえるのを待っているのだ。世話をしてもらえるので動くことはやめ、食べることに特化した形になったのだろう。幼虫というとイモムシを想像する人も多いと思うが、種によって形はさまざまなのだ。

8月19日、巣をのぞいてみると、幼虫は蛹になっていた。アリの蛹の多くは繭に包まれていて、ごはん粒のような形をしている。しかし、**蛹になったアリの一部は繭に包まれておらず、裸のまま**である。なぜ繭を作ったり作らなかったりするのかわからずよく分かっていないらしい。（幼虫時代の栄養状態が関わっているという説もある。）

卵を産んでからおおよそ1か月経った8月28日、ついに最初の働きアリたちが羽化した。**羽化したての成虫は白く透き通っていて実に美しい。**時間がたつとだんだん黒くなってお馴染みの姿になるのだろう。しばらく見ていると、まだ自分のからだの色もついていないというのに、すぐに他の卵や繭の世話をし始めた。

もうすぐ羽化しそうな繭たちは色が濃くなっていて、眼が透けて見えている。内側からもぞもぞと新成虫が繭から出ようとしていると、すかさず働きアリが寄ってきて繭を破るのを手伝っていた。

働きアリが増えてきて、大家族になってきたので、石膏を使って人工巣を作ってみた。うまく住みついてくれるだろうか…。

↑8月28日  
女王アリとその娘たち。  
女王アリは働きアリと比べてかなりからだが大変大きい。中央にとて小さい卵が見える。茶色っぽい大きい楕円形のは蛹が入った繭（まゆ）で、右下の繭は眼が透けて見えているのが分かる。もうじき羽化するのだろう。中央左には羽化したばかりの成虫がいる。羽化直後のアリは白っぽいことが分かる。はじめは女王アリ1匹で卵の世話をしたが、続々と羽化してきた働きアリたちが、自分の妹にあたる卵や繭の世話をし始める。



↑アリの幼虫。横から（左の写真）と正面から（右の写真）。この写真は校庭に営巣したオオハリアリの幼虫。アリの幼虫は**J型**で脚はなく、顎が発達している。



↑石膏で作った人工巣。実用はこれから。



↑校庭のクロヤマアリの巣。そっと石をめくると、働きアリたちが慌てて蛹をくわえて逃げ始めた。この写真のように繭は繭を作らずに裸の状態のものもある。